

29Cl-am02

教育の殿堂星薬科大学本館の辿ってきた道

○三澤 美和¹(¹星薬大)

星薬科大学は、1911（明治 44）年星一が星製薬株式会社を設立したとき、社内に教育部門を設け全人教育を開始したときが創立の起源である。星一は、若き日 12 年間の米国留学を終えて帰国したときには、“一に人、二に人、三に人なり、万事人なり”として、人をつくるのが業を営む上で最も大切であることを確信していた。星製薬創立 10 周年にあたる 1922（大正 11）年に星製薬商業学校に発展させた。現在品川区荏原の地に 10 周年記念モニュメントとして、知をそして人を永遠に産み出すことを念頭に大講堂（現在の本館）の建築に着手し、1924（大正 13）年に竣工をみている。竣工式にはドイツ大統領特使としてフリッツ・ハーバー博士が後藤新平とともに参列した。星一は、このとき「本講堂こそ実に世界に奉仕する人材育成の揺籃である」との言葉を残した。本学建学の精神の 1 つである。アントニン・レイモンドが建築設計者であった。大講堂設計依頼に関してレイモンド自伝が詳しく伝えている。大講堂には、100 人収容の数教室、千人収容の講堂、水泳場、体育館などを擁することが星一の条件であった。“明日までにデザインができるか”との星の問いに 34 歳のレイモンドは“できます”と答えた。大講堂は星一が留学していた名門コロンビア大学に似せられた。建物にはアールデコ様式が見てとれる。天井壁面には薬草を配したステンドグラスがはめこまれ、また一階には「薬狩」と「鹿茸狩」を描いた巨大な壁画が描かれた。1979（昭和 54）年に日本建築学会は、明治・大正期の名建築として指定した。伏見宮、秩父宮、広田弘毅、新渡戸稲造、リチャード・バートン、福井謙一など錚々たる人物が時代の折々に来訪している。星一の「人をつくる」の念願が年々達成されるかの如く、本講堂は約 15,000 人にも及ぶ卒業生を竣工以来世に送り出している。